２０２３年８月２７日「井戸に落ちたら」　青戸教会　　高橋克樹牧師

聖書　出エジプト記２３章１０～１３節、ルカ福音書１４章１～６節

８月は広島と長崎への原爆投下があったことを覚えるときです。この原爆投下は何故日本が選ばれたのか。いろいろな理由が挙げられていますが、アメリカでは戦争を終わらせるためだったというのが表向きの理由です。今でも多くのアメリカ人がそのように受け止めています。けれども、このところの少し違う論調が現れてきました。朝日新聞で、原爆を投下した人の孫と、日本で原爆の被災を受けた人の孫とが、一緒に日本での平和式典に臨んだという記事で、アメリカ人の孫が、学校の教師から、戦争を終わらせるために原爆を落としたという説明を受けるたびに、違和感を覚えたという記事が出ていました。もちろん、アメリカでの大多数の考えは、原爆投下によって戦争が終わったのだという考え方です。

ただ、歴史的に確認されていることは、原爆投下を命令したトルーマン大統領が人種差別主義者であったという事実です。また、原爆の実験段階で、牛や馬を原爆投下地点から一定間隔で配置して、その威力が動物にどのような影響を与えるかを実験していたという事実です。また、敗戦後、真っ先にアメリカは広島と長崎に医療チームを派遣して、原爆被害を調査したという事実です。さらには、広島にはウランによって製造した原爆を投下している一方、長崎にはプルトニウムによる原爆を投下しているという事実です。アメリカは原爆開発をウランとプルトニウムによる２種類の開発をしていたという事実です。つまり、両方の原爆を試したかった事情があったという諸状況から勘案すると、どうしても、原爆投下は人体実験の様相が強くなるのです。

さて、本日のルカ福音書の記事では、安息日にイエスがファリサイ派の人の招きで食事をしようとしていた時、そこに水腫を患っていた人がいたのです。ファリサイ派の人はイエスに対して挑発するように「安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか」と問いただしたのです。すると、イエスは病人の手を取って病気を癒して、病人をお帰しになったのでした。そして、イエスは「自分の息子、自分の牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらないものがいるだろうか」と言いだのでした。誰も、これに反論できない状況になったのでした。安息日だから井戸に落ちても助けないという判断をすることはないからです。

原爆投下に選ばれた広島は、当日金沢なども候補地だったことが後からわかっているのですが、天候の関係で広島に落とされたことがわかっています。ある意味、偶然性があったのですが、広島にいたことで、長崎にいたことで、原爆の犠牲になったことは何か犠牲者に、原爆の被害を受ける必然性があったわけではないのです。

いうなれば、本人に何の落ち度もないのに井戸に落ちたようなものなのです。出エジプト記２３章１０節以下によると、６年間ある産物を同一の土地で栽培した際に、７年目には休閑地にしなければならないという安息年の規定は、その土地の栄養素が６年間の栽培で吸い取られてしまうからです。だから、土地を７年目に１年間休ませることで、土地が産物を育てる力をリカバリ―させるという合理的な目的があるのです。

１２節以下にあるように、６日間仕事をしたあとは、やはり１日は休むという安息日の規定も、実際的に農耕に従事させた牛やろばを休ませ、同じく労働に従事させた奴隷や寄留者を休ませることで『元気を回復させるため』（１２節）だという合理的な理由が宣べられています。

けれども、そういう元気を回復させる目的で規定された安息年や安息日の規定が、ファリサイ派の人たちや律法学者たちにとっては、元気を回復させるためであることが忘れ去られ、休むという行為だけが金科玉条のように一人歩きしたのはなぜか。それは、安息年や安息日の規定がどうして起こったのかを考えようとしなかったために、規定が一人歩きしてしまい、それを守っていれば大丈夫だと考えてしまうようになったからではないでしょうか。

同じことは、原爆投下にも言えるのです。お笑いタレントの松本人志さんが以前、アメリカ人がいまだに原爆投下によって日本が全面降伏して戦争が終わったのだという意見が大多数を占めていることに、涙を流して抗議をしたことが話題になりましたが、世界で唯一の被爆国である私たち日本人が、原爆投下によって終戦を迎えることになったと本気で認識しているとしたら、ファリサイ派や律法学者と同じように、原爆投下の真実を考えないような精神状況になっていると言わざるを得ないのではか。

そういう硬直化した考えから、例えば、京都は日本文化の伝統の街であるから、原爆投下をアメリカは避けたのだというような、根拠のない説明も出てくるわけです。けれども、イエスは安息日にも何の遠慮もなく、病人を癒すのです。目の前で、病のために本来の生き方が疎外されている人を癒すことに集中するわけです。原爆で被災した人たちだけでなく、その子供、その孫までもが影響を受けていることがわかっているのですが、そういう方々も本来の生き方ができない状況に追い詰められていると言えるのです。影響が出ていない場合もあるのですが、やはり、体内被曝を受けた方の不安な感情をお聞きしたことがありますが、本来の生き方がしづらい状況に追い詰められている方もいるのです。

現代の私たちの感覚からすれば、安息日であっても井戸に落ちた牛や子どもを助けるのは当たり前のことですが、安息日に労働をしてはならないという硬直化した考え方に縛られているならば、たとえ、子どもであっても、安息日に井戸に落ちた子供を引き上げることが安息日規定の違反になるかもしれないという考えが頭をかすめるのではないでしょうか。

問題は、人間として本来あるべき生き方ができる世界を創り出す自分の役割を考えたならば、決して原爆を非戦闘員である人間の上に投下するようなことはするべきではないのです。そして、そういう事態がどうして起こったのかを真剣に追及すべきなのです。そうしなければ、これだけ今の地球上に原爆がある中で、それを互いに廃棄していく条約を結ぶ方向へと進んでいかないからです。唯一の被爆国である日本が、いまだにこの条約に参加していない事実は、原爆投下の真実を突き詰めていっていないことが背景としてあると思わざるを得ないのです。イエスが本来の生き方をすべての人間にもたらすことを最優先していたことを思い出したいと思います。